

居芝猿乞居芝犬

ある所には、大芝居の小屋と猿芝居の小屋と同じ向合つて建つて居た。大芝居には犬が三十四匹ばかり、猿芝居にも猿が三十四匹ばかり倒つてあつた。大芝居の小屋の主人とは、猿芝居の小屋の主人とは、其の犬と猿さを朝から晩まで働かせて、せつせと金を貯めて居た。大芝居の主人は、猿芝居の主人よりも、早く餘計に金を貯めなければならぬと思つて居つた。猿芝居の主人は、大芝居の主人よりも早く餘計に金を貯めなければならぬと思つて居つた。それで二人は鎌倉の犬と猿さを無暗にこう使つた。ロクに食べ物も食べさせず、ロクに休ませもせずしに、矢箇に藝りさせた。けれども、それで最も瘦せこけて、眼がくぼ悪くなつて、ひよろんとして毛色が悪が出来なくなつて、ロクにぎ

人に噛みつく大や、主人を引摺る猿やが出来た。それはどの無茶な事の出来ない大や猿は、病氣になって黙つて死んで行つた。大や猿は氣が狂つて死んでも暫りは幾らでも見つかるが、藝を覺ねさせて一匹前にするには、食物や何かの費用がかゝる。それがわかると双方の主人は、今度は大さ猿を優待しだした。金ピカの袖なし羽織を着せたり、飾毛のある帽子を冠らせたりした。毛色の悪くならない位の食物をあてがつて藝の上手下手に依つて、位とか勧等とか云ふものを定めてねだて上げる様にもした。それでは大さ猿どもは何んだか主人を大變親切な好い人の様に若へ出して、又せつせじ忠勤を勵んだ。

油鹽をかけた。『わが前達は、あの犬の奴等が蟹に味方をして、わが前達の祖先を殺した事を知つて居るか。わが前達は先祖の靈を慰める爲めに、犬の奴等に勝たなければならぬ。何んでも勵け、働きさへすれば犬の奴等に吠面かゝせてやることが出来る。犬は主人の話を聞いて、猿が惜くなつた。猿は主人の話を聞いて、犬が惜くなつた。犬と猿とは牙を磨き、爪をこすつて睨み合ひながら、せつせと藪を廻んだ。

犬の主人と猿の主人とは、木戸錢が費用よりも過するのを見て、その話を大と猿とに言つて聞かせた。犬と猿とは、少しもそれを貰へるわけではなかつたけれども、矢張り自分の金でも貯まる様に考へて、せつせと主人の懷をふくらませてゐた。

のそり／＼と出掛けで行け
ブ／＼、吠／＼付く自衛車の種
傍若無人が船の種
汗を流してコンクリーすれ
やがて出来たる西洋館も
俺等が住まへる認だやなし
俺等貧乏人の血を吸ふ
金持が住むんだから娘の種
俺等は又差錠場へ行つて
やつさもつさと夜の眠る寝
桑の木剥つたつみの種
いくら働いても箱物は着ら
金持が着るんだだから娘の種
俺等は又河岸や倅土場へ行
重い砂糖やら米やらを
ヨイショ／＼と運べども
俺等はおいしいものは喰はね
金持が喰ふんだから娘の種
俺等は又銀山へ行つて
數千尺の地の底から
金や銀を掘りだすのだけれど
金の指紋はさゝれはせず
これでは何んでも彼んでも知

大芝居 猿芝居

兩方の主人をもうけさ

なか
き
ん
原 貞

蟹を助けて猿を挫いた義勇の士であつた。猿の奴等はその時からお前達に仕返をしやうとして居る。前達も一生懸命に働くて、猿の奴等を壓倒しなければならぬ。猿の主人は又、斯う云つて猿に

朝は暗い中からや／＼起き
ボロを重矢着で飯屋に這入
水ばなんさ／＼四辻に立て
さても身にしむ師走の風がふる
銀へと寒ざで身ぶるひするひ
二兩じや／＼工場の手博
行けよ／＼さん買に買わね

三大猿の猿さばくは兎同志だ。お吉とし猿さ

卷之三

卷之三